

オレリエン・ハンクーの スイスへの誘い (最終回)

AU REVOIR!



今回で、「スイスへの誘い」は最終回を迎えます。

国際交流員として3年間勤めてきました。振り返ってみると、あっという間の3年でした…

この3年間でたくさんの思い出を作りましたが、一番印象に残ったことをことわざや慣用句を使って紹介したいと思います。

友好都市交流事業に6回も参加させていただきました。私のよく知らないスイスの地域に行けて、毎回新しいことを発見しましたが、いっしょに行った町民の方にとってどれほど衝撃的で、感動的で、印象的であったか、私には想像できません。帰った後に、皆さんに報告書を書いていただきましたが、語りきれないことだと思います。「百聞は一見にしかず」。

また、中学生の皆さんは、ホームステイで学んだこと、スイスで体験や発見したこと、そして帰国後に思ったことをどんな形で活かしていくか本当に楽しみです。海外に行っただけで影響は大きいと信じています。「可愛い子には旅をさせよ」。

多くの町民がイヴェルドン市民と交流ができ、今年初めてイヴェルドンからの訪問団を歓迎することも大成功で終わりました。これからもイヴェルドン市と鏡野町の交流が長く続きますようにと願っております。

「物は試し」

国際交流において、一般的に言えることですが、学校訪問で特にそう思いました。

鏡野町に来たときには先生としての経験はまったくなく、最初は試行錯誤でしたが、回を重ねるうちに子供達が私に慣れてきて、私の授業(?)に興味を持ってきて、私も子供を相手にすることに慣れてきて、一緒にゲームや勉強するのが楽しくなって、子供達と会うのを毎回楽しみにしていました。

鏡野町の子供たちは元気すぎるくらいで、最初は圧倒されたのですが、ものすごいエネルギーもくれました。そして、子供はいかに大切な存在であるかを知りました。

最近、剣道と再会しました。鏡野町に鏡野高校があった時代、剣道部を国体と全国優勝に導いた表江先生のことを語る「走りながら」という本を読み、無性に剣道をしたくなりました。剣道を再開して、稽古が終わった後に先生が「一期一会」の話をしてくださいました。その意味がとても深く、私の中でとても大切な言葉となっています。何もかも「一期一会」であると気づくと、「今」をもっと大切に、一緒にいる人、一緒に過ごす時間も

掛け替えのないものとなるはずで。

鏡野町を離れる今、「一期一会」を胸に、その言葉に巡りあえた剣道を再開したきっかけとなった表江先生の銅像の前で写真にしかったのです。

私は鏡野町を離れるわけですが、新しい国際交流員が来ます。その後任者の名前は Christophe Sauteur (クリストフ・ソーター) です。先輩達のサシャ・モナシオンとラファエル・ヴェ、そして私と同じジュネーブ出身ですが、私達と違って日本語学科を卒業していません。ですが、彼に関しては、「枕を高くして寝る」ことができます。本人にまだ会った事はありませんが、日本語でメールのやり取りをしていますし、彼は京都に一年間留学したばかりです。そして、来日するときに東京で会う約束をしています。彼は皆さんに会うのをとても楽しみにしているそうです。

最後に、これから私がどうなるかについてですが、スイスには帰りません。8月7日から、東京にある自治体国際化協会で働く予定です。働くだけならましですが、初めて都会に暮らすわけでもあります。「大海の一滴」になり、不安と期待が募るばかりですが、鏡野町で積んだ経験とたくさんの思い出を胸に頑張っていきます。日本での人生は始まったばかりです…そして、地平線へとつづく道と一緒に歩んでくれる大切な人が出来ました。幸せです!

日本語で別れを告げるときに、さようなら、ごきげんよう、じゃあね、あるいはバイバイが使えますが、皆さんに「さようなら」は言いたくありません。やはり、フランス語で「もう一度目にかかることを願う」時に言う別れの挨拶と感謝の言葉で終わらせたいと思います。

オールヴアル エメルシ プルトワー
AU REVOIR & MERCI POUR TOUT !

